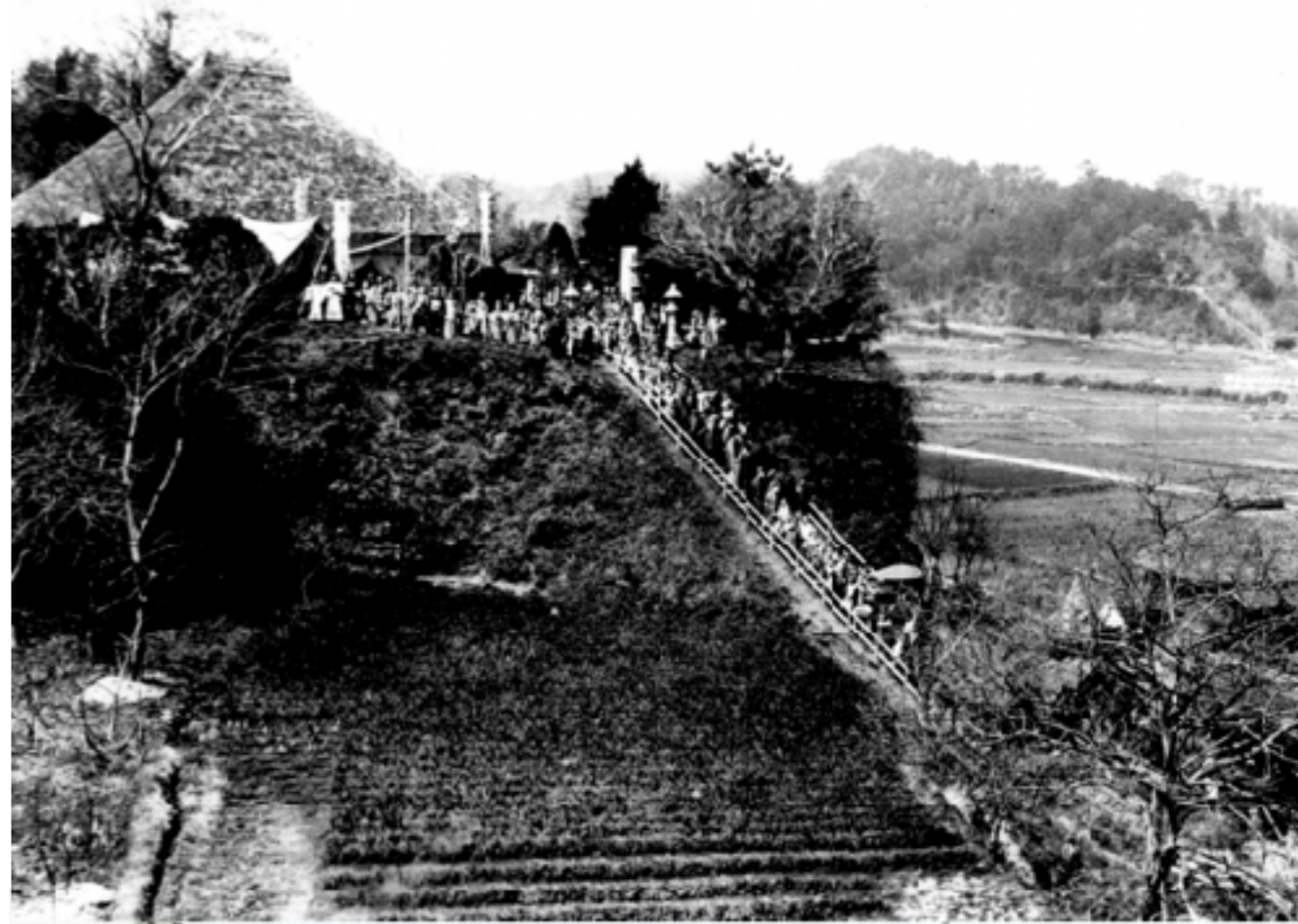


大道の紹介



1. 大道の位置

大道は、金沢八景から六浦を通り鎌倉に至る六浦道にあります。六浦道は、文字通り、鎌倉と六浦湊とを結ぶ幹線道路でした。金沢・六浦は風浪を防ぐ良港だったため、鎌倉幕府の外港として、物流の拠点となりました。六浦や釜利谷で製塩が始まると、朝夷奈切通を通過して、鎌倉に塩が運ばれました。六浦道が縦断する大道は、地名の通り当時は大きな道でした。朝夷奈切通は、1241（仁治2）年に鎌倉幕府が六浦と鎌倉を結ぶ幹線道路（六浦道）を開通させるために、山を切り開いてつくられました。この切り通しが開かれた時に広い道に整備され、二間幅（3.6メートル）という当時としてはかなり広い道でした。

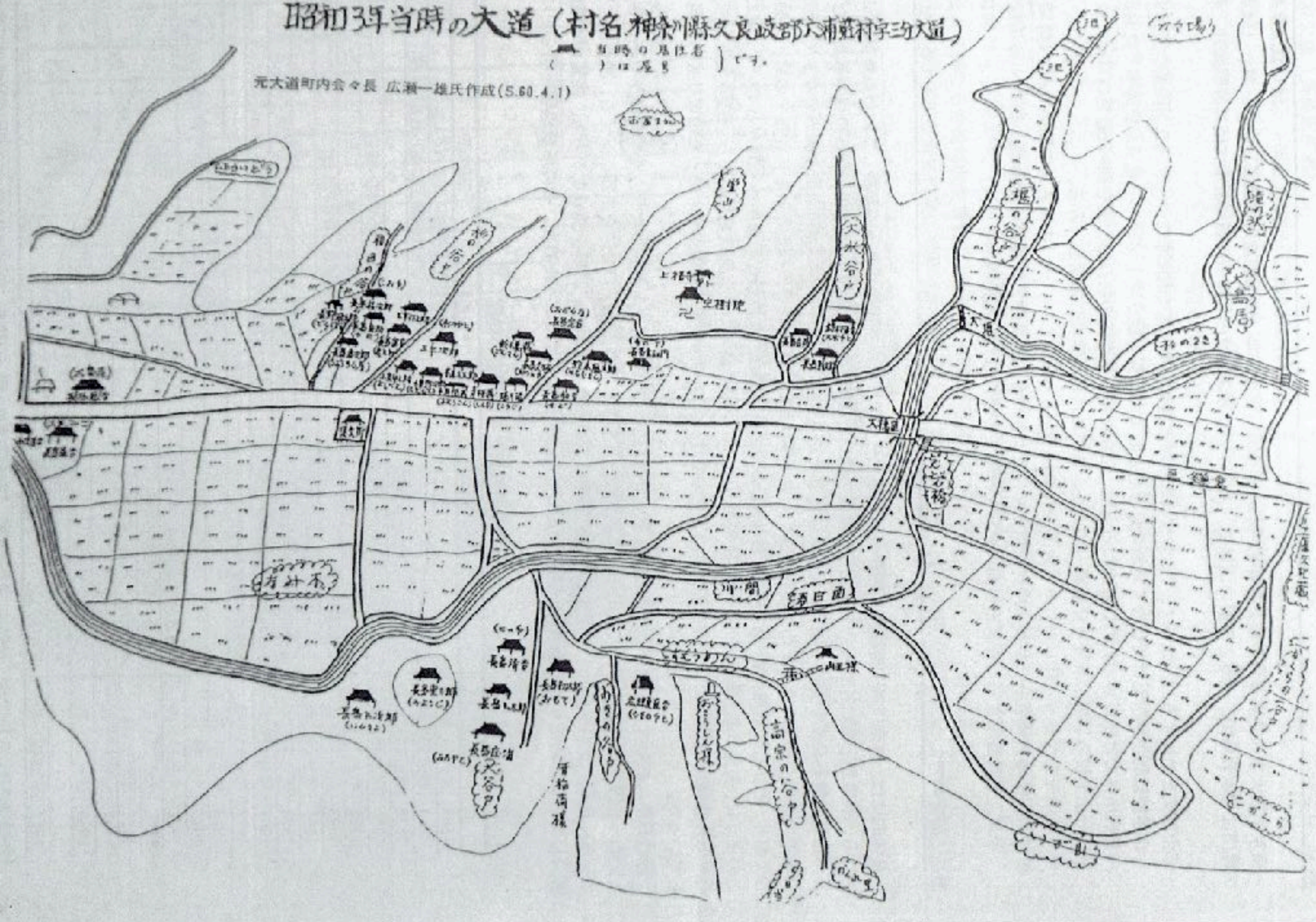


「金沢の海の変遷」（神奈川県立金沢文庫発行）より

昭和3年当時の大道 (村名 神奈川県久良岐郡六浦藍村字の大道)

▲ 当時の居住者 () は屋敷

元大道町内会々長 広瀬一雄氏作成 (S.60.4.1)



大正10年(1921年)

古地図：大道町内会 廣岡英二様 ご提供 ※青文字は昔の地名、赤文字は今の建物です (廣瀬)



いが山 かくれ里 夕日あたり
こかくら 高宗の谷戸 わきの谷戸
大道中学校 かくらの谷戸 山王神社

お庚申様 稲荷山
すもう免 大谷戸
春日免 お稲荷様
川間 どんど川

鼻欠地蔵 大道橋
どんど焼 山王橋
交番 セブンイレブン

横浜屋 郵便局
大鳥居、滝の沢 中台
宝樹院 エールハウス
関所跡 大道集会所

大堰 ローソン
大水の谷戸 小泉又次郎誕生地碑
そこ免 環状4号線

堰の谷戸 堂山
杉の谷戸 ココス
和田の谷戸 大道小学校

茅場、ひのき山、大池 お富士様
諏訪神社

ふうらいどう

白山道 ↑

長生寺

並木天満宮 光傳寺

郵便局 千光寺

三分小学校

諏訪の橋 侍従橋

ヨークマート クリエイト

返子 ← 浦賀 →

2.大道の生活

大道の戸数は32戸で、その殆どが茅葺屋根の家でした。そのため、村では茅場を所有し各戸の屋根葺替えは大体30年に一度の割合で行われていました。毎年、1戸ずつ屋根替えを行うと32年目で順番が回ってくるという計算になります。

お正月の行事が終わると1月7日くらいから茅刈りが行われます。この行事は村人が総出で行う作業で一人ひとりがナタ鎌で刈り取ります。各自弁当持参で大鳥居から茅場へ行く人、堂山の尾根伝いに行く人などがあり、山は大変賑やかでした。夕方になると各自が刈り取った茅の束5~6束を背負い、屋根替えの家近くの田圃端に積んで置き、2月~3月の屋根替えを待ちます。屋根替えの当日になると、各人は金銭の代わりに編んだ縄を持って手伝いに行き、朝方は互いに顔が分かりますが昼頃になるとススで顔が真っ黒になり、人別が分からなくなります。屋根屋さんは釜利谷の職人さんに依頼し、古い茅をはぎ取る作業、新しい茅を乗せて青竹（ほこ竹）で茅を押さえる作業が始まります。手伝いの人が屋根裏に入って外側から屋根屋さんが竹針のように縄を突き刺し、屋根裏の人が縄を付け替え、丁度糸で縫い合わせるようにして茅を固定します。午後3時頃から屋根の刈り込みが行われ、屋根屋さんが屋根左右から大鋏で刈り込みます。この刈り込みが終わると屋根の形がきれいになり、丁度女性が髪結いに行ってきたように綺麗に仕上がります。この光景を周辺から見守って見物する人々が誉めたたえます。

この行事（事業）を長く存続するため、「屋根無尽」が行われていました。一定の掛金を拠出し、屋根替えの費用に充てる仕組みでした。茅葺屋根は、燃え易い茅材を使用することから、火災発生の要因となるという事由で立替えられ、現在は、大道には一軒も残って居ません。この屋根無尽は、村人の親睦目的でその後も続いていましたが、自治会の旅行会などに変化し、屋根無尽は自然消滅しました。月に一回集まるとの屋根無尽での四方山話は楽しいものでした。



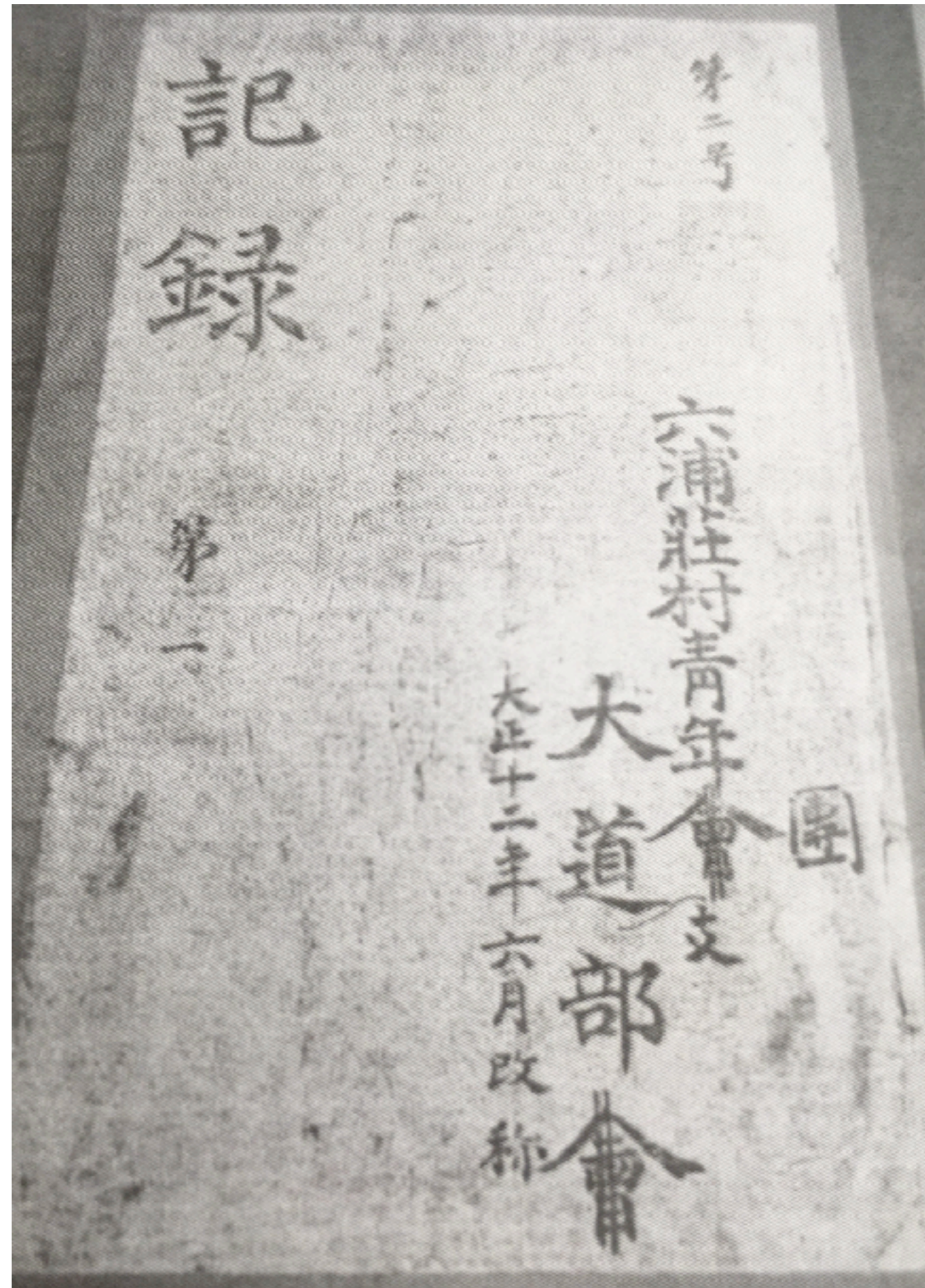
3. 大道の青年会

大道の青年会は大道に住む32戸の長男は、必ず入会することに決まっており、尋常高等小学校を卒業すると直ちに入会したものです。年齢は16歳以上、入会するときは月に一度行われる常集会で全員に紹介され、その集会では必ず会食がありました。私が入会したのは1937（昭和12）年5月でしたが、その時の会長さんが天井好きな人で、わざわざ横須賀の桜屋の天井をご馳走してくれたことを思い出します。青年会は消防団とともに村の行事には必ず参加し、村の原動力になっていました。毎月、日曜日の夜7時から常集会が行われて、その月にあった出来事を発表する会でした。

その会では教養の向上を図ることも行っていましたが、それぞれ自由なテーマで意見を発表します。大道には教育熱心な方がいられ、その発表内容について様々な評価を加えてくれました。また、青年会の中堅以上の方を対象として自強会という会がありました。目的は、「自分から努め励むこと」を目標にした会でした。意見の発表にも自然と熱が入り、自分の体験と経験が発表されます。戦争中は、日本国民皆兵といって、満20才になる男性は兵役に行くことが義務づけられていました。そこで兵隊に行った時の経験や失敗談などを話して、これから兵隊に行く方が、参考にしたものです。また、青年会は教養だけでなく、青年会主催の家族慰安会も年一回行われました。内容は落語・講談あるいはハーモニカなどによる演芸が行われ、家族が一夜を楽しんだものでした。

7月14日の天王祭は、早朝から各家で採れた野菜などを持ち寄り、キュウリ揉みなどの料理を作り祭りのご馳走にしました。このような青年会の活動により、大道から努力して立身出世された多くの方々が居られました。小泉又次郎さんもその1人です。大道青年会を振り返ってみると、内容のある明日に向けた行動規範が示され、諸先輩の方からの温かいご指導で、本当に良い人生経験の場であったことが思い起こされます。

現在も、このような組織や教育の場があれば、青年の非行や乱れがなくなるように感じられ、世の中にもう一度「昔の青年会」のようなムードが漂う場が欲しいものだと思っています。



4.大道の四季

大道は、山と田んぼ、侍従川というすばらしい自然環境に恵まれていました。大道の四季を綴ってみたいと思います。

（春）雪が溶けて最初に蕨（ふき）のとうが顔を出す、蠟梅（ろうばい）の黄花が輝くころ、長かった冬に別れを告げる。田面に張った氷も消えて、田圃に水たまりが出来るところになるとお玉杓子が泳ぎ始める。明堂（侍従川沿の民家）の吉野桜が満開になって、辺り一面花吹雪になり、竹藪では鶯が鳴き田圃の土手には土筆が顔を出し蒲公英の花で埋まる。春日面の猫柳も白金色の芽を吹きはじめる。

（夏）五月になると水も温くなり農作業が始まる。稲苗も大きく育って子供たちは苗間に入りズイ虫（害虫）を取る。六月中旬夜間には夏祭りの太鼓の練習が行われ、威勢の良い太鼓の音が聞こえてくる。この頃からそろそろ田植えが始まる。

七月十四日は瀬戸神社の夏祭りで、瀬戸、六浦、川、三艘の順に屋台が並び、各村中に屋台を繰り出し、大道へは丁度昼頃に到着する。夜間になると小川や田圃の畦道で蛍が飛び交い、蛍を呼ぶ子供の声が聞こえてくる。

「ホーホー-蛍来い。あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、ホーホー-蛍来い。」

八月の暑い昼下がり大池の栓が抜かれる。池には鯉、鮒、泥鰌、川海老などが沢山いて子供たちも大人も夢中で魚取りに興じる。帰り道大堰で泳ぎ、夕方から鼻欠地蔵前の広場に集まり田圃に水引をする。かくらの谷戸の蓮田では子供達が蓮の実取りに夢中になる。八月十五日はお盆の中日で、夕方から松明に火を点けて「虫送りの行事」が行われる。

（秋）田圃一面が黄金色に染まると、そろそろ稲刈りが始まる。伊賀山の周辺の土手では彼岸花が満開となって丁度、赤の絨毯（じゅうたん）を敷き詰めたようになる。里山では百舌（もず）が鳴き、この頃になると山栗（小粒だが甘く味がよい）拾いが始まる。堂山から登って「お富士山」を廻り、茅場あたりまで出掛けると、子どもが遊びながらでも袋いっぱい位とれる。十月一日は山王様の祭りである。幟を立てて参道には灯籠をぶら下げる。鳥居の前に寿司屋が出て参拝する人を持って成したと村の長老から伺った。十一月二十三日は収穫祭で、大道の田圃でとれた米は大変良質で、いつも一等米の評価であったと聞いている。

（冬）雪は毎年2～3回降り、三十センチ位積もる。雪が降るとパッチンを作ってホオジロ、アオジなどを捕って遊ぶ。お正月には新しい服や靴を買ってもらい凧上げ・羽根つき・双六等に興じる。一月十四日の早朝はドンド焼きの日で、前日に集めた門松や書初めを積み上げ焼き上げる。この火で餅を焼きこれを食べて無病息災を祈った。一月十五日頃になると茅刈りが始まる。村人が一つになり、協力して行う村総出の事業である、この行事が終わる頃には、里山の木々の芽もふくらみ四季は一巡する。



5.大道を流れる侍従川

侍従川は、大道の人たちを支える川であったと同時に、四季折々の変化ある自然が大道に住む人たちの目を楽しませてくれていました。最後に、侍従川の思い出を綴りたいと思います。

侍従川は、朝比奈峠を水源とし大道を縦断し、川、三艘を通り抜け平潟湾に注ぐ清流である。川の名前は中世から伝わる照手姫伝説に登場する乳母の「侍従」に由来する。

侍従川の水は清く絶えたことがなく、お陰で大道は大変豊かな村であった。現在、大道中学校のバス停の近くの岩に彫られた風化したお地蔵さんは鼻欠地蔵と言ひ、相州（鎌倉）と武州（金沢）の境に肥えた土地争いの仲裁役として建立されたが、争いがなかなか絶えないのでお地蔵さんが見せしめに、自ら立派な鼻を欠いてしまったと言ひ伝えられている。

この川はうねうねと曲がりくねり、自然の川そのままの姿をしており、両側は大名竹が生い茂り、遠くからでもひと目で川であることがわかる。川間のネコ柳が白銀色の芽を吹く頃になると侍従川にも春がくる。川の土手には土筆（つくし）・蒲公英（たんぽぽ）・董（すみれ）、蓮華（れんげ）・薺（なずな）などの野草で覆われ、川岸の竹藪では鶯が鳴き、鶴鴿（せきれい）・翡翠（かわせみ）・アオジが飛び交い、麦畑では雲雀がさえずる。六月になると田圃に水を入れる大堰が作られる。この頃から川の流量が減って子供達の川遊びの時期になる。大堰下の水溜まりには川海老、鮎、ハヤが棲んでいて、子供たちは我先に網でとる。川の下流ではかい堀りが始まる。これは水をせき止めて中の水をかい出して魚を捕る方法で鰻、泥鰌（どじょう）がよくとれる。

七夕が過ぎ、夏祭りが近づく夜、川岸で蛍追いが始まる。夜露で衣服がびしょりになるまで戯れる。八月末頃、大池の水が抜かれ、池の鯉・鰻が沢山いて大人も子どもも夢中になって捕る。これは年一度の楽しみな行事である。秋になって水が不要になると大堰が開けられ放水する。水の少なくなった川では鰻釣りが行われる。

十月頃、大潮になると諏訪の橋でハゼ釣りが行われる。十センチ位のハゼがよく釣れ、この魚は竹串に刺して焼き、お正月の昆布巻用として保存する。チンチンカエズ（黒鯛の子）や白魚も海から上がってくる。

秋も深まり稲刈りも終わり、雑木林に北風が吹き抜け、里山がすっかり冬支度を整えた頃、川岸には霜柱が立ち始め、川面は薄氷に覆われて侍従川も冬支度に入る。

